第２章　谷津ミュージアムづくり推進事業

１．谷津ミュージアムとは

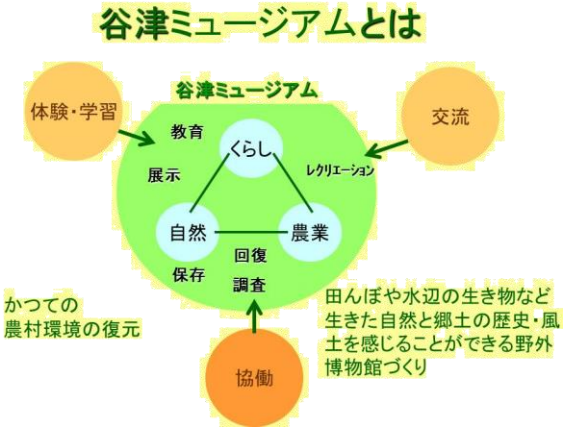


図 2-1　谷津ミュージアムとは

市では、平成 14（2002）年から、手賀沼沿いで最も谷津の地形と自然環境が残されている岡発戸・都部地区の谷津 36.7ha をまるごと保全し、多様な生物が生息していたかつての農村環境の復活をめざす谷津ミュージアム事業を進めています。

谷津ミュージアム事業では、農業、自然、くらしを一体的にとらえ、体験学習や市民相互の交流、農業者との交流を進め、さらに市と市民との協働で自然環境の保全・再生活動をはじめ、モニタリング調査などを進めていきます。

谷津ミュージアムとは、こうした活動を通して、生きた自然と郷土の歴史、風土を感じることができる野外博物館として整備していこうというものです。

（1）谷津の地形と谷津田

房総半島の北部には、台地に樹状の谷が入り込む独特の地形がみられます。この谷は「谷津（やつ）」と呼ばれ、低地部は主に「谷津田（やつだ）」と呼ばれる水田として利用されてきました。

谷津田には湧水が多く、年間を通して水に恵まれた立地条件である反面、沼田といわれる湿田でもあり、農作業については苦労の多い水田でもあります。

東京都や神奈川県では「谷戸（やと）」「谷戸田（やとだ）」と呼ばれる小さな谷の地形とそこに作られた水田を示す言葉があり、「谷津（やつ）」「谷津田（やつだ）」とはその成因と人々のかかわりが若干異なっています。

谷戸は‘谷の入口’の意味と解釈され、谷戸田は丘陵や山地の裾の比較的小さな水田を指す場合が多く、谷の奥にいくに従って棚田的に少しずつ高くなっています。谷戸田の水源は谷奥の山塊にあり、谷奥から下に用水を流す「田越し排水方式」となっています。これに対し谷津は、谷奥への標高の高まりは小さく、田の配置も中央の排水路から両脇へ高まる状態になっています。

谷津田の水源は斜面の両脇からしみ出る湧水で、斜面下部の用水路で調節しながら田を潤し、中央の排水路に水を流す「用排水分離方式」となっています。

谷津田では水環境の保全のために、両側の斜面はほとんどが林地に保たれ、その上の平らな台地に畑が広がっています。水田を担う農家集落は、谷戸田では田の下にあることが多く、谷津田の集落は田の上に位置します。そして台地上や斜面林を中心とする一帯には、四季の変化に富む、野生動植物の豊かな自然が残されています。

谷津田とその周辺は、原風景や自然体験の場として、多くの人とかかわりをもちつつ、誰からも親しまれてきた美しく豊かな自然環境です。

図 2-2　谷津田の原風景

（2）事業の目標

1）多様な生き物の保護・回復の場としての谷津ミュージアム

谷津は、多種多様な生き物を育む、自然の宝庫です。今も身近に残る生き物とその環境を保全するとともに、池や湿地環境の再生を図り、郷土の生き物を回復し、将来に伝えていくことが必要です。谷津ミュージアムではこれまでニホンアカガエルとヘイケボタルを指標生物としてその自然の状態を診断・評価してきました。また、そのほかにも保護上重要な昆虫や植物が確認されており、その保護・保存を含め、多様な生き物の生息環境に配慮し、それぞれの場所にあった維持管理を地権者とも話し合いながら進めていきます。

2）「谷津守人（やつもりびと）」や子どもたちを育てる谷津ミュージアム

農業やくらしの営みによって育まれてきた谷津の自然は、人が自然との関わりを大切にしながら受け継いできた里山環境です。自然の恵みを受けるだけでなく、谷津の自然や農地を育て、守る実践を通して、「谷津守人」と呼ばれるような人づくりを重視した活動を展開していきます。また、孫や曾孫の世代へ谷津の環境を引き継ぐためには次世代を担う子どもたちが今後の谷津を支えていくことが重要です。そのため、子どもたちが谷津で遊び、学び、自然を体感できる環境づくりを推進します。また、谷津で学ぶ子どもたちを含め、心豊かな人づくりや「谷津守人」育成講座である谷津学校を充実させていきます。

3）伝統的農業と文化を継承し、新たなくらしを生み出す谷津ミュージアム

昔ながらの水田づくりは、自然環境の保全や伝統文化の継承、自然と共存するくらしを実践していく上で重要です。谷津での水田づくりを続けていくためには、多くの手間と労力を必要とし、これを支えていくしくみの体制づくりが必要です。市では農業者と市民との協働により、自然・くらし・農業の 3 つのバランスがとれた環境づくりに取り組んでいきます。平成 18（2006）年度から復田した田んぼでは地元農業者の協力を得ながら、ボランティアや公募した市民、近隣の学校を中心に無農薬米や古代米づくりを行っており、今後もこれらの取り組みの拡充を図ります。

２．事業の概要

（1）谷津ミュージアムの会（設立：平成 16（2004）年 5 月 29 日）

市と市民の共同設置・共同運営で、お金も、労力も、権限も、市と市民がともにわかちあい、ともに責任を持ちながら、谷津の自然環境を守り育てる活動を進める団体です。

1）会員数（令和 6（2024）年 3 月 31 日現在）

個人会員・・・・・・・・・・・ 52 名
ファミリー会員・・・・・・・・ 16 名
賛助会員・・・・・・・・・・・ 1 名

2）活動内容

①「谷津ミュージアムの会通信」の発行（年 2 回）

②谷津展

日　時：令和 5（2023）年 8 月 19 日（土）、20 日（日）
場　所：手賀沼親水広場　水の館（手賀沼ステーション）
内　容：谷津に生息する昆虫・植物・風景などの写真
会の活動、田んぼ作業、小学校の総合学習等の写真パネル
谷津の航空写真、自生キノコの展示
活動写真のスライドショー
生き物観察、昆虫標本の展示
来場者：612 名

③自然観察会の開催

令和 5（2023）年　7 月 22 日（土）「夏の昆虫観察会」　・・参加者 29 名
令和 5（2023）年　7 月 30 日（日）「ホタル観賞会」　・・・参加者 42 名

図 2-3　夏の昆虫観察会の様子

④米づくり

市民ボランティアをはじめ地元農業者や谷津学校生と連携し、無農薬による米づくりを行っています。また、平成 22（2010）年度より実施している復田した田んぼでの市民公募参加者による米づくりを実施しています。

図 2-4　田植えの様子

⑤谷津まつり（収穫祭）

令和 2 年度から令和 4 年度まで新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となっていましたが、昨年度は 4 年ぶりの開催となりました。

谷津の畑や田んぼで採れた野菜やお米を使って、豚汁や赤飯づくりなど谷津の自然の恵みを味わうほか、谷津ミュージアム事業への理解を深めるための写真パネル展示等を実施しています。

図 2-5　谷津まつりの様子

（2）谷津学校

谷津の自然環境を構成する湿地、斜面林、水辺や農地を守り育てていく「谷津守人」と呼ばれるような人づくりをしていくため、平成 15（2003）年度から谷津学校を開校しています。

また、谷津学校卒業生の自主的な谷津での活動を支援しています。

○内容

①講義（谷津の自然の生態系や生物・林の構成など）

②実習（生きもの調査・田んぼづくり・林づくり・自然観察など）

○講座生

期	年度	人数	卒業後自主的な活動をしている人数
1	平成 15（2003）年度	10 名	6 名
2	平成 16（2004）年度	16 名	11 名
3	平成 17（2005）年度	6 名	5 名
4	平成 18（2006）年度	10 名	8 名
5	平成 19（2007）年度	11 名	6 名
6	平成 20（2008）年度	4 名	4 名
7	平成 21（2009）年度	10 名	7 名
8	平成 22（2010）年度	9 名	6 名
9	平成 23（2011）年度	6 名	3 名
10	平成 24（2012）年度	13 名	4 名
11	平成 25（2013）年度	8 名	5 名
12	平成 26（2014）年度	9 名	3 名
13	平成 27（2015）年度	3 名	1 名
14	平成 28（2016）年度	7 名	2 名
15	平成 29（2017）年度	6 名	5 名
16	平成 30（2018）年度	8 名	6 名
17	令和元（2019）年度	0 名	0 名
18	令和 2（2020）年度	8 名	3 名
19	令和 3（2021）年度	12 名	5 名
20	令和 4（2022）年度	0 名	0 名
21	令和 5（2023）年度	5 名	0 名

（3）拠点整備

1）田んぼ広場

谷津ミュージアムの会の会員をはじめ、多くの市民が、かつての谷津田で行われていた伝統的農業を体験するための「田んぼ広場」を整備します。

平成 17（2005）年度は、田んぼの整備に先行し、米づくりや田んぼの維持管理に必要な耕運機や刈払機などの農機具をはじめ、作業を行うための機材を収納する作業小屋を建設しました。

平成 18（2006）年度は、地元農業者や谷津ミュージアムの会会員をはじめ、市民の皆さんの手づくりで、放棄された水田（約 2,500 ㎡）の復田作業を行いました。

平成 21（2009）年度も、地元農業者を中心に、市民の皆さんの手づくりで放棄された水田（約 1,500 ㎡）の復田作業を行いました。

また、平成 26（2014）年度には、農機具を収納するための倉庫（9 ㎡）を設置しました。

2）ホタル・アカガエルの里

平成 16（2004）年度から、豊かな自然の中で、ヘイケボタルやニホンアカガエルをはじめ、多くの動植物を観察することができる「ホタル・アカガエルの里」を整備しました。

現在、ヘイケボタルやニホンアカガエルが自生する湿地や水辺、樹林地の維持管理を、谷津ミュージアムの会及び谷津学校生を中心に実施しています。

〇面積：20,000 ㎡

〇施設内容

散 策 施 設 ：丸太階段の設置
：プレイフィールドの整備（進入路）
：観察デッキ（3 カ所）

安 全 施 設 ：JR 成田線横断防止柵の設置
：車止め（1 基）の設置

保 護 施 設 ：湿地保護柵木柵（約 70m）の設置

維持管理施設：井戸の掘削（1 カ所）
：ポンプ小屋の設置
：揚水管（ポリエチレン管：約260m）の埋設

3）多自然型護岸整備モデル事業

平成 16（2004）年度に、谷津の生き物の生息環境の回復を目指し、中央学院高等学校に隣接する水路の 100m区間で、人が水と親しめるような多自然型護岸に改修する事業を実施しました。この水辺の改修により水質の浄化作用を高めるとともに、水路の幅員を最大で 14.1mに広げ、ヘビやカエルなど谷津の生き物が横断できるように緩やかな勾配の自然護岸とする一方、市民が水と触れ合えるように階段を設置しました。また、護岸への覆土は現地の土を使い、これまで谷津で見られた植生の復活を目指しています。今後は、谷津ミュージアムの会や谷津学校生などと一緒に、水の浄化をはじめ、植物やホタルなどの生き物の回復状況の確認や、谷津の中からヤナギやハンノキなどの移植を行い、現地の生態系の回復を目指していきます。

図 2-6　多自然型護岸

（4）谷津ミュージアム事業推進専門家会議

農村環境、昆虫、植物、歴史文化の専門家で構成する専門家会議を開催しています。より自然にやさしい拠点整備の工法や、ホタル・アカガエルの里及び多自然型護岸の維持管理手法、谷津全体の環境整備について提言などをいただいています。令和 5 年度は 7 月 18 日（火）に開催しました。

３．谷津の自然

谷津は、手賀沼をはじめ、谷津田、森林、農地などが存在することから、多種多様な動植物が生息・生育する自然環境を有しており、多様な生物相を見ることができます。

（1）植物相・植生

台地上及び台地斜面には、コナラやイヌシデを主として、クヌギなどを交える落葉広葉樹やシイやカシなどの常緑広葉樹が混生している樹林地のほか、林縁には、アカメガシワ・ヌルデ・エゴノキなどが見られます。休耕田では、イヌスゲ・アカバナ・イヌビエ・タコノアシなどが群落を構成しています。また、放棄水田では、ヨシ・ガマ・セイタカアワダチソウ・カナムグラなどの群落となっています。

【注目される群落】

斜面林の常緑広葉樹林（スダジイやアカガシ林）及び湿地のヨシ・カサスゲ・クサヨシ群落。

【注目される種】

タコノアシ・イヌザクラ・イヌショウマ・サラシナショウマ・イチョウウキゴケ・カラスノゴマ・ウマノスズクサ・ヌマトラノオ・ミズワラビ・シケシダ類・サワヒヨドリなど。

（2）動物相

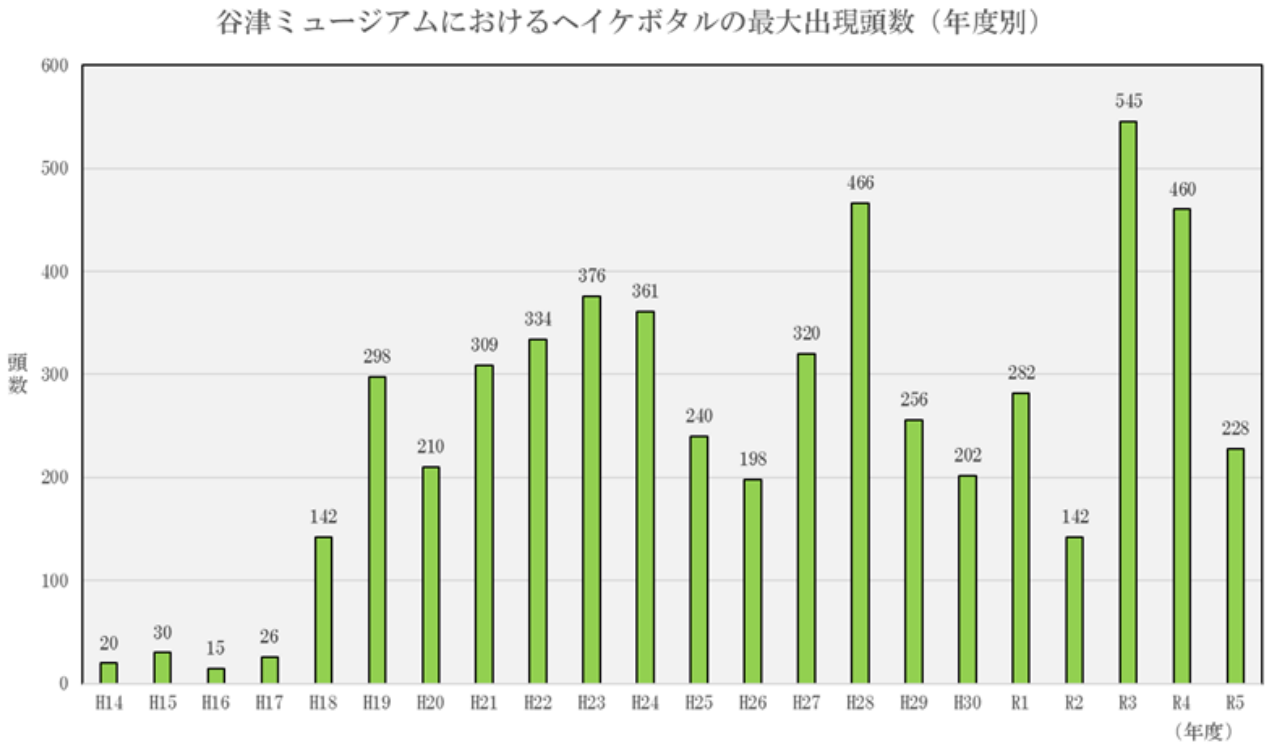
谷津田や森林など広域的複合環境を利用する動物として、タヌキ・オオタカ・サシバ・ノスリ・チョウゲンボウなどが確認されています。水田、湿地と斜面林が連なる谷津田の自然などの複合的な環境を利用する動物として、ノウサギ・タヌキ・ヘイケボタル・ニホンアカガエル・オニヤンマなどが確認されています。また、谷津ミュージアムではヘイケボタル・ニホンアカガエルを環境指標生物とし、ヘイケボタルの出現頭数・ニホンアカガエルの卵塊数の調査を行っています。令和 4（2022）年度の結果については図 2-7 のとおりです。

【注目される種】

1）鳥　　類：フクロウ・ダイサギ・チュウサギ・コサギ・オオタカ・チョウゲンボウ・カッコウ・カワセミ・セグロセキレイ・ウグイス・オオヨシキリ・ヒバリ・ツバメ

2）昆 虫 ・ ク モ：ウラギンシジミ・ウチワヤンマ・コガネグモ・ヘイケボタル

3）両生・ハ虫類：シュレーゲルアオガエル・ニホンアカガエル・アオダイショウ・ヤマカガシ



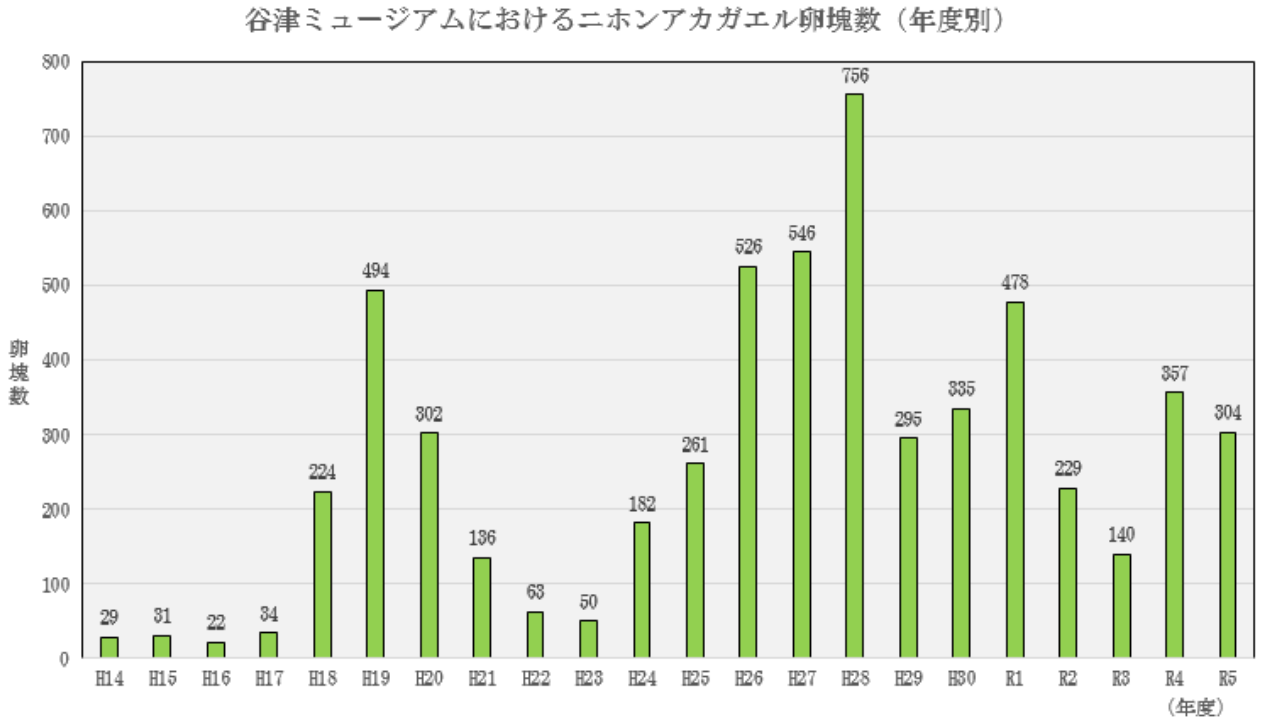


図 2-7　ヘイケボタルの出現頭数推移・ニホンアカガエルの卵塊数推移
（谷津ミュージアムの会 会員による調査結果より）

（3）湧水

谷津内の両斜面沿いに、28 カ所（右岸側 16 カ所・左岸側 12 カ所）の湧水・絞り水（浸みだし）が確認されています。